

藤原道長経筒に刻まれた願文をめぐって

—その文字は藤原行成の筆跡か—

宮川 禎 一

一、はじめに

京都国立博物館には国宝「金銅藤原道長経筒」一口が保管されている(挿図1)。奈良県吉野町の金峯神社が所蔵し、博物館の考古部門に寄託されているものだ。

藤原道長(九六六〜一〇二七)は平安時代を代表する貴族である。一条天皇から三条天皇そして後一条天皇にかけて主に左大臣として仕えた。その藤原道長が四十一歳であった寛弘四年(一〇〇七年)の秋八月に自ら登山して埋めた経筒である。

考古学的には紀年銘のある日本最古の経筒として重要であると同時に平安時代の信仰史を表す歴史的遺品として、さらには金工作品としての意義も大変深いものがある。近衛家陽明文庫に伝わる道長の日記『御堂関白記』の寛弘四年八月条に記された金峯山登山参詣記事とともに展示されることがたびたびである。いずれかの展覧会でご覧になった方も多いことであろう。

今回の論考はこの道長の経筒について考古学的でもなく歴史的で

もなく、金工作品としてもではなく、表面に刻まれた銘文を「書跡」としてみてみたらどうかという主題で書くこととしたい。

筆者は京都国立博物館で平成十九年(二〇〇七年)に開催した『藤原道長展』^①の準備段階以来、この経筒に刻まれた文字は三跡のひとりで和様の書の完成者である藤原行成(九七二〜一〇二七)の下書きによるものではないかと考えてきた。本稿ではその点を中心に銘文の書面的側面に焦点をあててこの経筒の意義を考えたい。

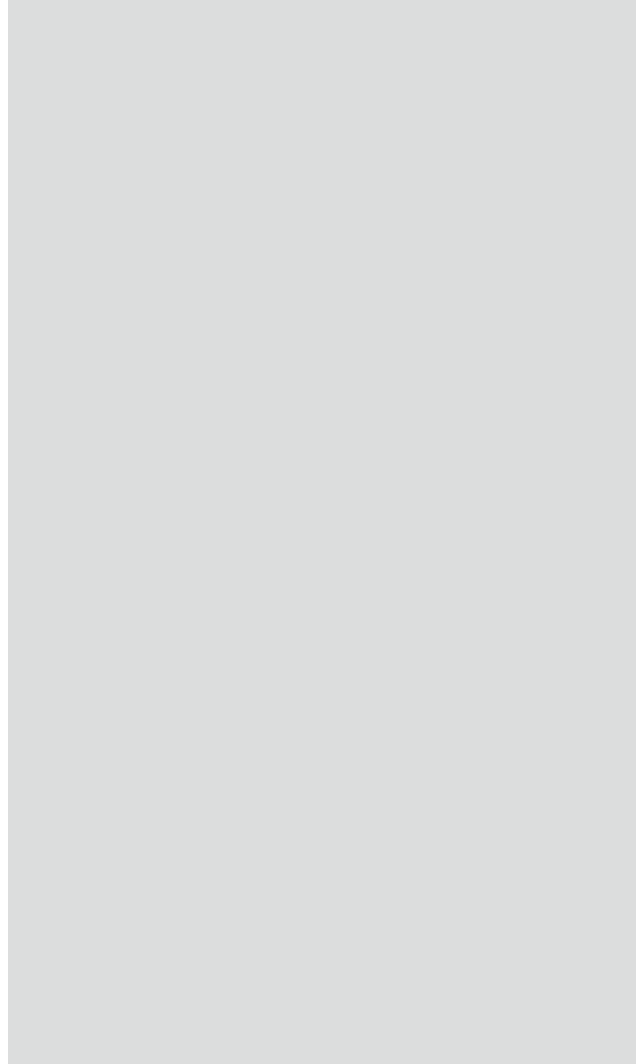
まずは経筒伝来の歴史的経緯から見よう。

二、金峯山経塚と道長経筒

金峯山経塚は考古学的な用語としての遺跡名である。現在は奈良県吉野郡天川村の山上ヶ岳の山頂に営まれた経塚を中心とする平安鎌倉期の遺物出土地をそう呼称している。^②山上ヶ岳は標高一七一九m。山頂から蔵王権現が湧出したという修験道の聖地である。飛鳥時代末に役行者が開いたとされる。現在も女人禁制が守られる修験の山である。藤原道長がこの金峯山に登り、山頂部に埋経を行った

のは今から一千年余り前の寛弘四年（一〇〇七年）八月十一日のことであった。京都を出たのは八月二日、山城国・大和国の寺社などを参詣しながらの金峯山登山（御嶽詣）であった。その道のりは道長が『御堂関白記』に詳細に記している。そのことをテーマに京都国立博物館で特別展覧会『藤原道長―極めた栄華・願った浄土―』を開催し、図録には金峯山参詣の行程について検討記述したので参照いただきたい。

この経筒は山頂の一角に埋納された。『御堂関白記』には「その上に金銅の灯籠を立て、常灯をともした」と記されている。いわゆる金峯山経塚^③と呼称される山上の遺跡は、現在知られている出土品の内容から平安時代前期から鎌倉時代～室町時代にかけての遺跡であることが分かる。道長だけではなく、多くの参詣者（主に貴族）が



挿図1 金銅藤原道長経筒 全景

次々と捧げ物をしたようだ。出土品のすべてが地下埋納品ということではなく、なかには堂宇への奉納品なども含まれているらしい。いわゆる金峯山経塚造営の中心となる時期は遺物の内容から十一～十二世紀の平安時代後期とみなされる。

道長の経筒は十七世紀後半、元禄年間に山上本堂（現在の本堂）の改修工事に伴って地中から掘り出されたものという。同時に道長以降に貴族が奉納した金銅製経筒の類（金峯山寺所藏品等）も出土したようだ。経筒は江戸時代以来、金峯神社で伝えられてきた。明治三十五年には旧国宝に指定され、昭和二十七年に現在の国宝に改められた。昭和四十九年以後は京都国立博物館の考古部門において保管されている。

経筒本体は厚さ〇・二cmほどの銅板を鍛造したものである。表面には厚い鍍金が施されている。高さ三六・四cm、経筒本体の直径は一五・三cm、筒底は本体に鍛接されている。蓋は被せ蓋で大振りにして豊かなフォルムを持っている。蓋の四方に開いた孔は本体の口縁部をも貫通するもので、経巻を納めたのち二本の銅棒を十字に差し込み、外に突き出た部分を曲げて蓋が開かないよう固定したものと推測される。鍵を使わないことも注意される^④。江戸時代に出土した際に銅棒は切断され、内部から経巻が取り出されたのであろう。経筒の内面には白っぽい付着物がみられる。

この経筒内にあつたとされる道長自筆の紺紙金字法華経などは現在、東京国立博物館や五島美術館などに分散収蔵されている。紙の下半部が腐朽して欠損しているのが特徴である^⑤。

経筒底面には「伴延助」という経筒作者の名前が刻まれている（挿図5F）。この人物は藤原実資の『小右記』（寛仁二年十二月三十日条）に牛車の金物を修理する業者の名として現れる。すなわち道長の経筒は仏具製作者ではなくて車屋に発注されたらしい。経筒の外形は、日本最古の経筒らしく、いかなる先行形態もつけない形状を呈している。十一世紀初頭の京都には「経筒」の概念がそもそもなかったので、長期間の耐久性という目的を示して特別に発注されたのだろう⁶。

本体の身の周囲には五百余字の願文がびっしりと刻まれているが、平安時代の経筒でこれほど長文を刻んだものは稀である。この道長経筒のもつ特異性をよく示す部分である。経筒には文字（漢字と蓋周囲の梵字）以外には文様などの装飾は全くない。道長の長女である上東門院彰子の金銀鍍宝相華文経箱（国宝・延暦寺蔵・長元四年、一〇三一年製作）が唐風の宝相華文で華麗に装飾されているのに対して、きわめて実質的であるといえる。

経筒の表面に刻まれた銘文（挿図2）には道長ら平安時代の貴族が何故に金峯山までわざわざ登山し、経巻を埋納するのかの意義が明確に記されている。いわゆる「願文」である。まずその内容を見ておこう。

南瞻部洲大日本國左大臣正二位藤原朝臣道長百日潔

齋率信心道俗若干人以寛弘四年秋八月上金峯山以手

自奉書寫妙法蓮華經一部八卷无量義經觀普賢經各

一卷阿弥陀經一卷弥勒經上生下生成佛經各一卷般

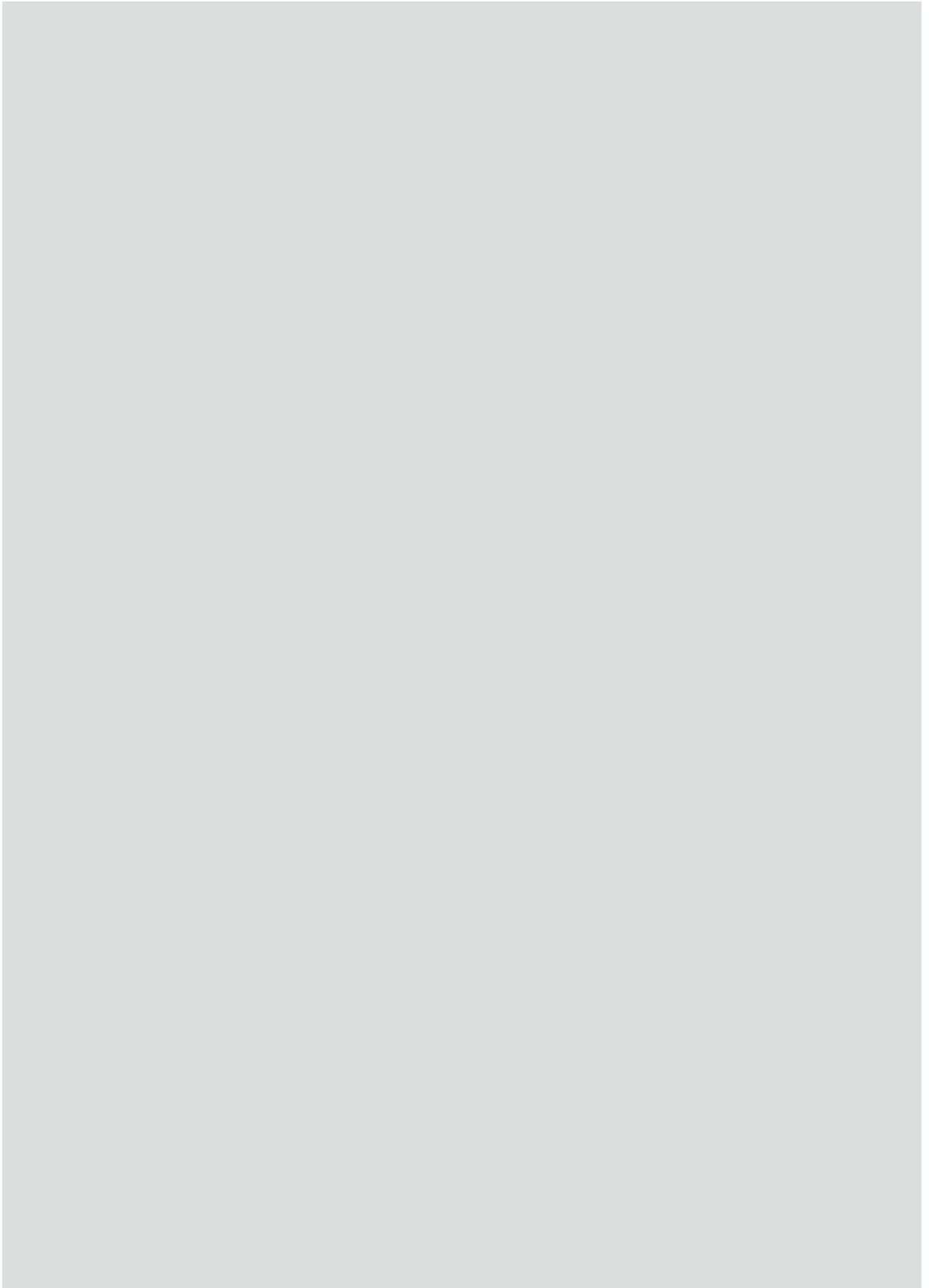
若心經一卷合十五卷納之銅篋埋于金峯其上立金銅

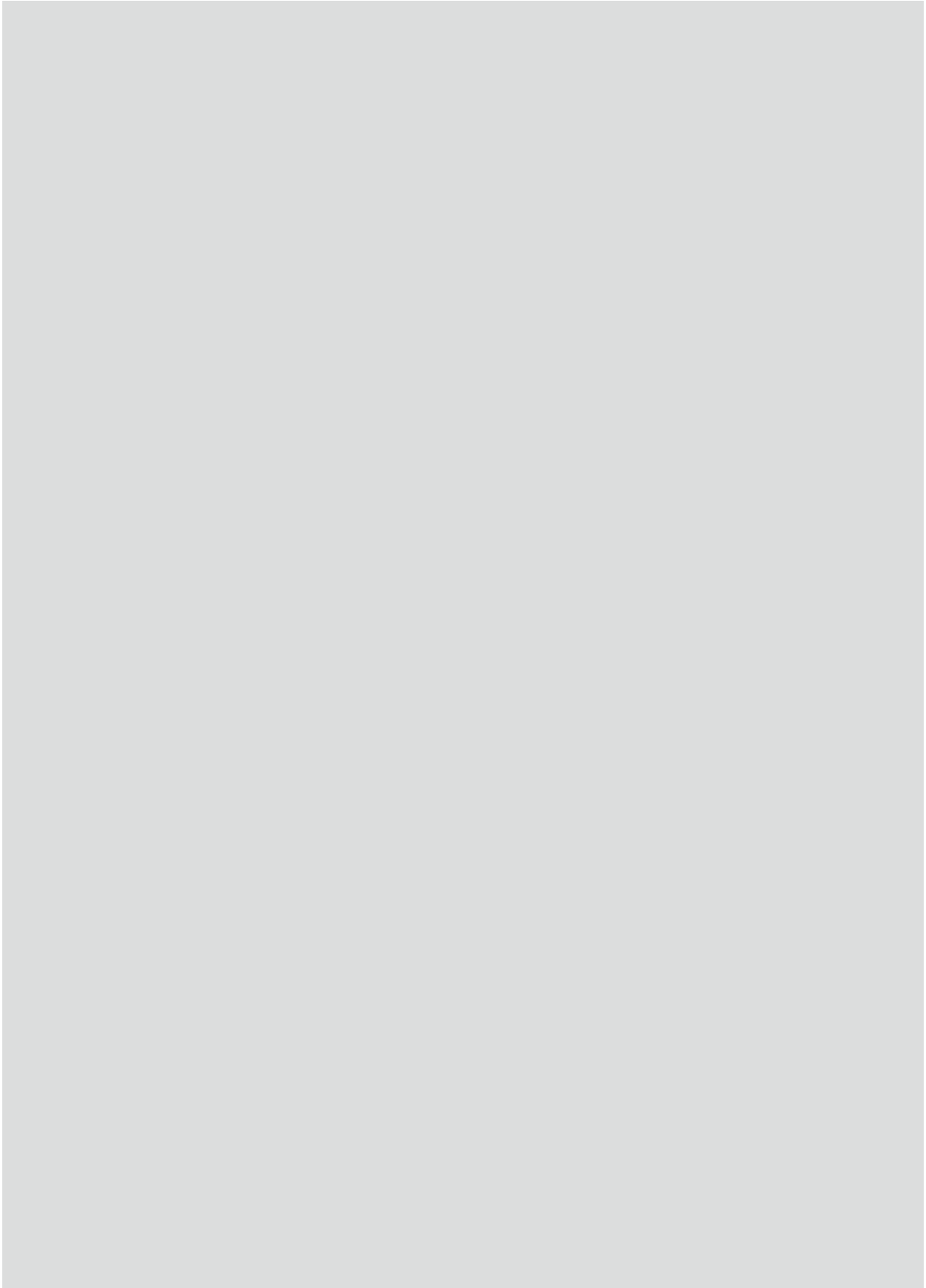
燈樓奉常燈始自今日期龍華晨於是弟子焚香合掌白
藏王而言法華經者是為奉報釋尊恩為值遇弥勒親近
藏王為弟子无上菩提先年奉書欲齋參之間依世間病
惱事与願違為恐浮生之不定且於京洛供養先了今猶
所以埋於茲者蓋償初心復始願之志也阿弥陀經者此
度奉書是為臨終時心身不散乱念弥陀尊往生極樂世界
也弥勒經者又此度奉書是為除九十億劫生死之罪證
无生忍遇慈尊之出世也仰願當慈尊成佛之時自極樂
界往詣佛所為法華會聽聞受成佛記其庭此所奉埋之
經卷自然涌出令會眾成随喜矣弟子得宿命通知今日
事如智者之記靈山於前會文殊之識往劫於須臾者歟
嗚呼發菩提心懺無量罪運東閣之匪石加南山之不騫
埋法身之舍利仰釋尊之哀愍藏信心之手跡憑龍神之守
護願根已固我望已足抑憩一樹之蔭飲一水之流猶不
是小緣況此之道俗若干人或香花手足與此善者
或有以翰墨工藝從此事者南無教主釋迦藏王權現知見
證明願与神力圓滿弟子願法界眾生依此津梁皆結見
佛聞法之緣弟子道長敬白

寛弘四年丁未八月十一日

読み下しは次のとおり

南瞻部洲大日本國左大臣正二位の藤原朝臣道長は、百日潔齋して、信心の道俗若干人を率い、寛弘四年秋八月を以て金峯山に上り、手づから書写し奉る妙法蓮華經一部八卷、無量義經、觀普賢經各一





挿図2 金銅藤原道長経筒銘文の拓本

卷、阿弥陀經一卷、弥勒經上生・下生・成仏經各一卷、般若心經一卷、合せて十五卷をこの銅篋（經筒）に納め、金峯に埋め、その上に金銅燈楼を立てて常燈を奉り、今日より始めて龍華の晨（弥勒下生の時）を期す。

是に於いて弟子（道長）香を焚き、合掌して蔵王にもうしている。法華經はこれ釈尊の恩に報い奉らんがため、弥勒に知遇し、蔵王に親近せんがため、弟子の無上菩提のためなり。先年（長徳四年）書し奉りて（金峯山に）もち参らんと欲するの間、世間病惱（疫病の流行）により、こと願いと違ふ。浮生の不定を恐れ、しばらく京洛に於いて供養を先ず了えん。今なおここに埋めんとする所以は、蓋し初心を償い、始願の志を復せんがためなり。

阿弥陀經は此の度（寛弘四年）書し奉る。是は臨終の時、心身散乱せず、弥勒尊を念じ、極樂世界に往生せんがためなり。弥勒經はまたこのたび書し奉る。これ九十億劫生死の罪を除き、无生忍を證し、慈尊の出世に遇わんがためなり。仰ぎ願はくば、慈尊成仏の時にあたり、極樂界より仏所に往詣して、法華会の聴聞をなし、成仏の記をその庭に受け、ここに埋め奉りし經卷が自然涌出し、会衆をして隨喜成さしめんことを。

弟子、宿命通を得て、今日の事を知る。智者の靈山を前会において記し、文殊が往劫（永遠）を須臾（一瞬）において識るが如きものか。

嗚呼、菩提心を発し、無量の罪を悔ゆ。東閣（道長）の匪石を運び、南山（金峯山）の不騫を加う。法身の舍利を埋め、釈尊の哀愍を仰ぐ。信心の手跡（書寫經卷）を蔵し、龍神の守護をたのむ。願根すでに固く、我が望みすでに足る。

そもそも一樹の蔭に憩い、一水の流れを飲むもなおこれ小縁ならずや。いわんやこの道俗若干人、あるいは香花手足を以てこの善にあずかる者あり。あるいは翰墨工芸を以てこの事に従う者あり。

南無教主釋迦、蔵王権現、知見證明せられ、願はくば神力に与り、弟子の願いを円満ならしめん。法界の衆生はこの津梁（案内）に依り皆見仏聞法の縁を結ばん。弟子道長敬つてもうす。

寛弘四年丁未八月十一日

願文は前・中・後の三段に区分される。前段にはこの經筒を埋納する経緯を事実として記述。中段には納めたそれぞれの經卷の書寫の経緯とその目的を記す。さらに後段には対句をなす美辞麗句で釈迦と蔵王権現に願意をささげている。

まず前段には「左大臣正二位の藤原道長は、寛弘四年秋八月に自ら寫經した法華經など十五卷をこの經筒（銅篋と記される）に納め、金峯山頂に埋めて、その上に金銅の燈楼を立てて常燈をともし、今日から開始して弥勒下生の時まで待つ」と埋經の目的を記している。

中段には、法華經八卷書寫の目的は「釈迦の恩に報いるため、また弥勒に知遇し、蔵王権現に親近するため、そして自分の無上菩提のため」であった。先年すなわち長徳四年（九九八年）に参詣奉納の予定であったのだが、疫病の流行などの理由で参詣は断念され、京都において供養だけは終えていたものだった。改めて今回、寛弘四年（一〇〇七年）に参詣埋經するのは「初心を貫徹しもとの志を遂げるため」だと述べている。また、阿弥陀經は今回、寛弘四年に書寫したが、その目的は「自分の臨終にあたって、心身散乱せず、弥勒尊を念じて極樂世界への往生を遂げるためである」と記してい

る。極楽往生への願いの表現である。さらに弥勒経も寛弘四年に書写したのだが、「慈尊出世」の時、すなわち五十六億七千万年後の弥勒出世の時に極楽世界から自分がその場に往って弥勒に会い、法華会を聴聞し、ここ金峯山に埋めた自らの経巻が自然に「涌出」してその場に参集した衆生を随喜させたい、との願いが記されている。

後段には金峯山参詣の願意や様々な協力者への謝辞などが美文で綴られ、释迦と蔵王権現への祈念で終わっている。

この文章は経筒に刻まれた銘文としては最も長文である。経巻埋納の趣旨を願文の形で述べたものとして極めて貴重であるとともに『御堂関白記』寛弘四年八月十一日の山上祭儀の記述とも一致している。その意味で日本史資料のなかでも最も重要な経筒といえる。願文の文体は極めて高尚であり、道長自身の文章というよりは文章博士の大江匡衡と記載内容を打合せたうえで彼に作文させたと考えるのが自然である。

寛弘四年に行われた藤原道長の金峯山参詣埋納のちに日本各地で盛んとなる経塚造営の最古の確実な例として重要な位置を占めている。道長の成功例（翌寛弘五年に敦成親王が誕生し、道長家の繁栄が約束された）は藤原摂関家の後裔、たとえば曾孫藤原師通の金峯山参詣埋納（寛治四年・一〇九〇年）などにも大きな影響を及ぼした。経塚造営は十二世紀に入ると爆発的な流行を見せたが、その祖型がこの道長の金峯山埋納だったのである。

三、刻まれた文字のこと

経筒の表面に文字を刻んだのは金属工場の職人の伴延助あるいはその弟子であった。しかしその文字は工人の字ではない。誰か上手な人の筆による紙本の下書きがあつて、それを経筒の表面にぐるりと糊で貼り付け、その墨文字の中心軸を削るように鑿（たがね）で経筒の表面に刻み込んだものであつたと推定される（銅筒の表面に直接願文を墨書する可能性もある。しかし曲面である銅筒に筆で細い字を直接墨書するのは大変であろう）。その下書きの文字を誰が書いたのかという問題である。

その筆者が全く無名の書家ならば問題は少ないが、藤原行成が書いた可能性が少しでも考えられるのならば別次元の話であり、おおいに検討に値するテーマとなる。

経筒の刻まれた文字は鑿により刻み込まれたものであり、紙に墨で書いたものではない。それに対して紙本墨書の文字は筆によるものであつて、字画の中にも線の太い細い、描線の強弱、墨の濃淡がある。一方、経筒に刻まれた文字は鑿の幅によつて規定された一定幅の細い線（細かく見れば列点の集合）で表わされたものである。もとが墨書であつたことが分かりにくいものだ。しかし一か所だけ筆の太さを示す場所がある。それは文末の「寛弘四年八月十一日」の「日」である。本体側面の願文でここだけが双鉤体すなわち囲み字になっているのだ。その意味を想像すると、もともとなる紙本墨書の清書の文字があつて、それを正しく表現しようとしたのが末尾の「日」だったのであろう。筆文字には幅がある。伴延助の工房で最初

に試しに双鉤体で金工職人が刻んだ字が末尾の一字だったのではなからうか。他の字をそうでなくて線文字にしたのも、この「日」を試してみた結果、すべての字を双鉤体で刻むことの困難さが理解されたため線文字としたのではなからうか（冒頭の「南」を双鉤体で刻んだならば、最後までそう刻まねばならなくなる）。すなわち幅のある墨書下書きの墨線のほぼ中心をとる形に表現することに決めたのである。十二世紀の青銅経筒には双鉤体の銘文をもつものが散見されるが、文字数は道長の経筒よりもずっと少なく、字自体も大きいので可能だったのだろう。経筒に直接墨書した年号や願主名を経年劣化で消えないように鑿で縁取ったのだろう。

道長の経筒の場合、銘文をほぼすべて「単線で表現したこと」が文字の印象を紙本墨書の「書跡」とは異にしている。しかし子細に観察すればもとの文字が紙に墨と筆をもってスピードとリズム感をもって書かれたものであることは明白だ。金属の表面にコツコツと刻んだような硬さの線ではなく、流れるような筆使いが鑿で刻まれていながらも看取できる。紙本の下書きが存在したはずだ。

四、藤原行成の人物と書

藤原行成（九七二〜一〇二七）は小野道風・藤原佐理にならぶ三跡のひとりであり、和様の書の完成者とされている。小野道風（八九四〜九六六）は行成より二世代前の書家である。道風は屏風土代などの名品を残す。行成の生まれる前の人物だが、行成はこの小野道風の書を研究したことは後述する『権記』に散見される。もう一人の藤原佐理（九四四〜九九八）は道風と行成の間、十世紀後半の

人である。その書風は奔放だ。行成二十七歳ごろまでは生きていたが、行成自身は佐理の書について触れるところは無い。書風も受け継いでいないようだ。

藤原行成は道長の祖父藤原師輔の長男伊尹（太政大臣）の孫である。家系は藤原北家として申し分ないのだが、父義孝がはやくに亡くなったため昇進の点で父の引き立ては望めなかった。残された彼の日記『権記』や道長の『御堂閔白記』など直接的な記録や歴史物語の記述から藤原行成が実直で勤勉な能吏であったことが分かる。現代用語に変換するならば「有能な高級官僚」だったといえよう。一条天皇と左大臣道長の間で連絡調停を頻繁にし、故実を調べて儀式作法を定め、一日に諸方を駆け回っていたことを見ると、現代の公務員も驚くほどの精勤ぶりだ。優雅に和歌を詠み、宴会を楽しんでいた平安貴族のイメージを覆す働きぶりである。道長や一条天皇からも有能実直を買われて厚い信頼が寄せられていたことも知られている。行成は『大鏡』や『枕草子』にも登場し、その人柄をうかがうことができる。

行成の書風に言及するには筆者は門外漢なのだが、あえて述べればその文字は「ひたすら字の上手な人の書」のように見える。たとえば空海や藤原佐理のような「天才的な芸術家の書」と対比するとケレン味は少ない。「秀才的であり、慎み深く教養ある人の優美な書」だと言えよう。特徴は仮名の影響を受けて右肩の部分（転接）が丸い漢字を書くこと、そして文字のバランスのよさである。

現在に伝わる藤原行成の代表作は東京国立博物館所蔵の国宝「白氏詩卷」と京都能本寺所蔵の国宝「本能寺切」⁷（図版2）であろう。筆跡を特定個人の筆跡だと判断するには徹底的な比較が欠かせな

いと考える。一見良く似た文字もあれば似ていない文字もある。似ている方だけを取り上げて強調すれば同一人物になりそうであるし、異なる傾向の文字を取り出して示せば別人のようにも思える。しかし一人の個人のなかでも同じ文字の形に差異が生じることはまた自然なことである。筆跡鑑定⁸⁾の難しさはそこにある。文字から筆者を特定することの困難さは容易に想像できる。

しかしながら躊躇していてもはじまらないので、具体的な文字の比較対照をおこなってみたい。筆跡の異同判定の大敵は「先入観」である。無心で物を見ることがいかに難しいことか。

五、経筒銘と『本能寺切』の文字の比較

まずは経筒の文字と行成の書の文字を一文字ずつ比較してみよう(挿図3)。白抜の文字は道長経筒の拓本(右列)。黒い文字は本能寺

切の紙本墨書の文字である(左列)。本能寺切の行数は本体の冒頭から。見やすいように拡大している。

道長経筒からは第十九行第十六字目の「飲」。
本能寺切からは第十八行第九字目の「餘」。

挿図3①。偏は同じだが隣の異なる二文字をわざわざ選んだ。差異よりも共通性を認識しやすい組み合わせであろう。偏の「食」のバランスがほぼ同じである。もつとも似ているのは隣の「欠」と「余」の一画目の左払いの入る位置と角度である。異なる文字でありながらきわめてよく似ている。筆者が異なってもこのような共通性が認められるものであろうか。

挿図3②もまた異なる漢字である。

道長経筒からは第二十二行第二十一字目の「見」。
本能寺切からは第十八行第十二字目の「光」。

字画の下半部を比べると「ノ」と「乙」の形とバランスが一致している。違う文字だからこそ共通性が際立つ。純粋に比較することができる。

挿図3③も見てみよう。

道長経筒からは第二十行第十一字目の「人」。



挿図3 文字の比較(1)

本能寺切からは第十八行第十三字目の「入」。

この二画の漢字はもちろん違う文字なのだが、右払いと左払いの角度と曲率がよく似ている。無碍に違う人物の文字だとは言えないのではないか。

挿図3④を比較してみよう。

道長経筒からは第二十二行第二十字目の「皆」。

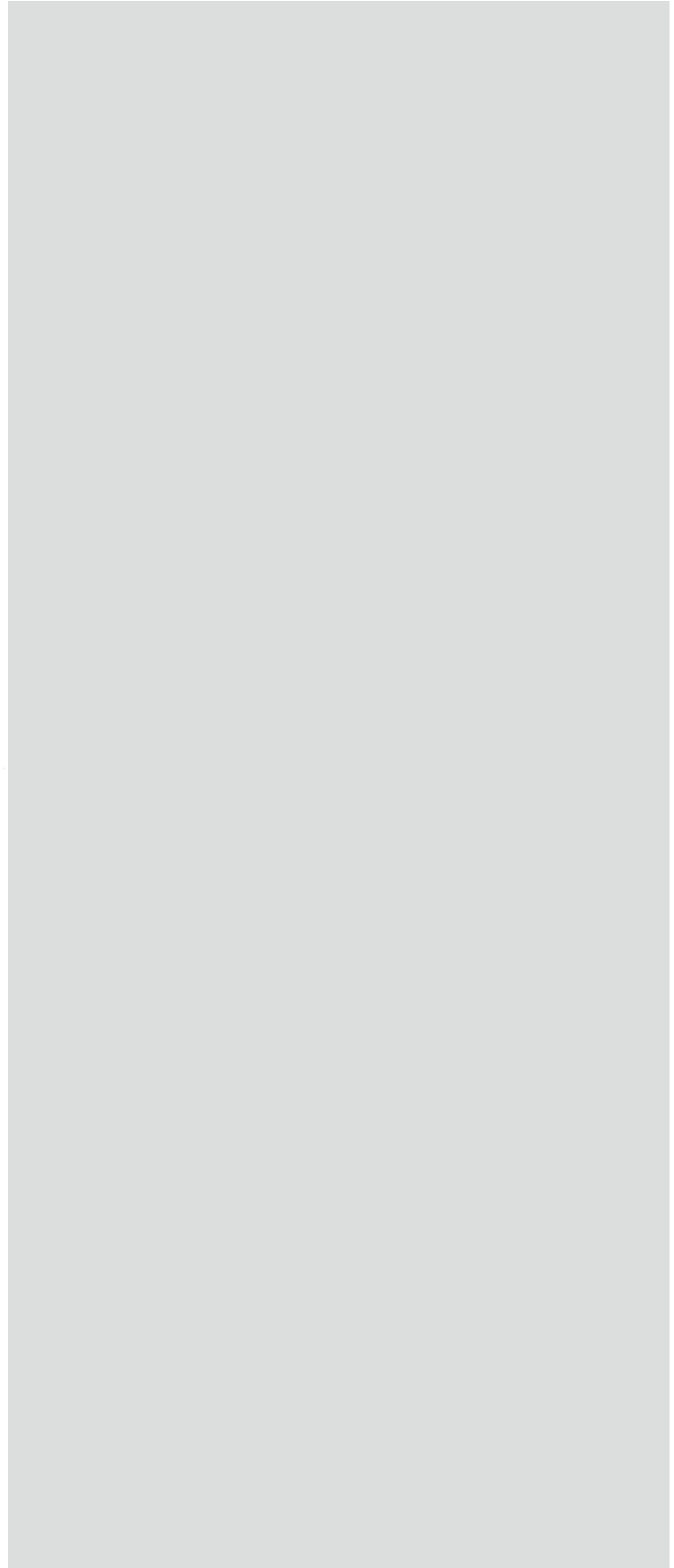
本能寺切からは第十八行七字目の「階」。

これは阜偏の有無の差であるが、「皆」の上側の「比」のバランスが酷似している。下の「日」の形も似ている。

挿図3⑤は同一の文字である。

道長経筒からは第二十二行第五字目の「神」。

本能寺切からは第十八行第四字目の「神」。



挿図4 文字の比較（2）

同じ漢字であると共通性よりも微妙な差異に目がとられがちである。しかし「神」という文字の隣の「申」という部分の「日」のバランスとそれを貫く伸びやかな縦線のもつ雰囲気が共通していると言えよう。特に申の二画目の右から下へ曲がる転接部の丸みが一致している(④の皆の「日」の字画の転接も同じ形)。また示偏のバランスも近いものがある。また示偏と隣の「申」の位置関係も経筒と本能寺切で酷似している。

挿図4は同じ文字を選んで両者を並べて示した。文字のサイズはやや縮小している。よくよく見比べていただきたい。上から順番に「南・山・峯・其・朝・望・香・供養・成・事・也・心・者・於・洛」である。この中では自分の名前の一部である「成」などが注意される。

筆者の所見は経筒の文字と本能寺切の文字とは明確な相似点が数多いということだ。左から右に伸ばす横線がわずかに右上がりなのだが、その傾斜角度がほぼ一致しているようだ。その一方で明確に異なる要素、個人の書体の変動の範囲外の特徴は見つけづらい。すなわち両者は同一人物の筆によるもの、いかえれば経筒の文字の下書きは藤原行成の手になるものだと判断に至ったのである。

ここで筆跡の異同を時代の様式と個人の特徴とを区別できるのかという疑問も生じるだろう。十一世紀初頭に書かれた文字ならば宮廷の周辺では少なからず藤原行成風の文字が流行していたのではないかと疑問である。時代のもつ様式的文字なのか、藤原行成自身の筆跡かという区別をどうつけるのかという疑問が湧いて当然である。しかし挿図3の①に示した経筒の「飲」と本能寺切の「餘」を再度見比べてもらえれば、「似たような文字」ではなく、「同一筆

者の文字」だとは見えないだろうか。しかし結論は急ぐまい。

次に書風ではなく、歴史記録から行成の字か否かを考えてみたい。まずは藤原道長の『御堂関白記』、次に藤原行成の『権記』の記載を見てみよう。⁹⁾

六、『御堂関白記』に見える清書

道長の日記『御堂関白記』の寛弘四年あたりにはこの経筒願文を藤原行成に依頼したという内容の文章は出てこない¹⁰⁾。しかし残された御堂関白記を通読すれば、道長は行成に様々な仕事を依頼しているが、その主要な部分が書であったことが分かる。以下に御堂関白記の中の行成への清書依頼を列挙してみよう。

(イ) 寛弘元年三月二十五日 源倫子、大般若経供養

「願文は早朝(大江)以言が持ってきた。すぐに右大弁(藤原行成)の許に送った。右大弁は清書して持ってきた。」

(ロ) 寛弘元年五月十九日 故三条院のための法華八講始

「(大江)以言が願文の草案を持って来た。禄物を下賜した。すぐに右大弁(行成)の許へ送ったところ、清書して持ってきた。」

(ハ) 寛弘元年六月四日 藤原行成の手本

「右大弁(行成)の許に紙を送り、手本を書かせた。(長男)頼通のためである。」

(ニ) 寛弘元年九月九日 新楽府

「右大弁(行成)が『新楽府』上巻を新たに書いて持って来た。」

(ホ) 寛弘元年九月十五日 新楽府

「右大弁(行成)が『新楽府』の下巻を持って来た。」

(ヘ) 寛弘元年十月十八日 仮名本

「右大弁(行成)に仮名本七巻(その内(小野)道風の手跡が二巻であった)を貸した。」

(ト) 寛弘二年正月八日 御齋会

「右大弁(行成)の許から手跡一巻が届いた。これは先日、続紙二巻を遣わしたものの内である。」

(チ) 寛弘二年八月二十五日 浄妙寺鐘銘

「(大江) 匡衡朝臣が、浄妙寺の鐘銘を持って来た。左大弁(行成)に渡し、清書するように命じた。」

(リ) 寛弘二年十月十九日 浄妙寺三昧堂供養

「式部権大輔(大江匡衡)が願文を持って来た。禄物を下賜した。左大弁(行成)が願文と呪願文を清書した。」

★ 寛弘四年八月二日～十四日 道長金峯山参詣

(ヌ) 寛弘四年十月一日 土御門第仏経供養

「願文は(大江) 匡衡朝臣が作った。禄物を下賜した。左大弁(行成)がこれを清書した。」

(ル) 寛弘四年十二月十日 法性寺寺額を揮毫

「法性寺には、未だ寺額を懸けていない。僧都(院源)が(自分に)揮毫するように依頼してきたので、これを書いて届けた。私は元々、能書ではない。度々、自分には無理であると伝えたのであるが、云うところの功德によって、敢えてこれを書いた。午剋に、この寺額を南門に懸けた。西門の寺額は左大弁(行成)が書いた。」

(ヲ) 寛弘五年十二月二十日 敦成親王百日の儀

「(一条) 天皇の御膳を供した後に、数献の宴飲があった。後に公卿が和歌を奉仕した。左衛門督(藤原公任)が、皆に盃を勧めて和歌を詠ませた。左大弁(行成)が、筆を取って和歌の序題を書こうとした。ところが、帥(藤原伊周)が左大弁から筆をとりあげて序題を書いた。人々は、互いに不審に思った。」

(ワ) 寛弘六年十一月十五日 中宮御在所淵醉

「(自分が) 和歌を詠んだ。侍従中納言(行成)が、それを書いた。」

(カ) 寛弘六年十二月四日 皇子敦良九夜の産養

「皇太后宮大夫(藤原公任)が盃を取って、若宮(敦良親王)を寿ぐ和歌を詠み、諸卿に盃を廻らせて和歌を詠ませた。侍従中納言(行成)が、その和歌を書いた。」

(ヨ) 寛弘七年八月二十八日 除目

「未剋に除目の儀を始めた。亥四剋に儀が終わった。天皇の御前を退下した。侍従中納言(行成)が、清書を勤めた。」

(タ) 長和元年五月二十七日 故一条院御法事

「兵部卿(藤原忠輔)が御願文を持って来て、侍従中納言(行成)が清書した。」

(レ) 長和四年七月十五日 入宋僧念求に書状を託す

「念求に託した品々の目録について)私(道長)の書状の文は、侍従中納言(行成)が書いた。」

(ソ) 長和四年十月二日 五尺屏風

「新たに作った五尺の屏風八帖を、侍従中納言(行成)の許に送った。色紙形を書かせるためである。侍従中納言に黄牛一頭を贈った。」

(ツ) 長和四年十月二十三日 皇太后宮屏風和歌

「中宮大夫(藤原道綱)・春日大夫・大皇太后宮大夫(藤原公任)・権大納言(藤原頼通)・権中納言(藤原頼宗)・新中納言(源経房)・三位中将(藤原能信)が、皇太后宮に参った。屏風のあちこちに和歌を書くことになっている」ということだ。「侍従中納言(行成)が、これらの和歌を書いた」ということだ。」

七、『権記』にみる行成の書

一方、藤原行成も詳細な日記を書いている。原本は残らないが後世に記録されかなりの分量が残っている。その行成の日記の中から書にかかわる記載を抜粋してみよう。藤原行成が藏人頭となった長徳元年(行成二十四歳)から権大納言であった万寿元年(行成五十三歳)までの日記からである。

(あ) 長徳元年九月二十八日 小除目

「先ず右大臣(道長)が天皇の御所に参上し、紙と墨を召して、小除目が行われた。子四剋に小除目が終わった。大臣は退下した。(藏人頭である自分が)清書した後、直物を添えて、これを奏上した。」

(い) 長保元年八月二十六日 不動尊像に識語を書く

「国平朝臣が来た。広貴に不動尊像を描かせ、私はその由緒を尊像の下に書いた。」

(う) 長保元年十月三十日 彰子入内の為の屏風色紙形を書く

「倭絵四尺屏風の色紙形を書いた(故(飛鳥部)常則の絵である。和歌は、現在の左丞相(道長)以下が詠んだ。)」

(え) 長保元年十一月十一日 屏風色紙形を書く

「今日、『唱和集』の屏風の色紙形を書き終わった。」

(お) 長保二年二月三日 詩草等を拝借

「帥宮(敦道親王)の許に参つて、天曆(村上天皇)御製の詩草一卷を借り奉つた。また(小野)道風の飛白体の書一卷を貸してもらつた。」

(か) 長保二年二月二十三日 障子色紙形を書く

「召しよつて左府の許(土御門第)に参つた。寢殿の障子の色紙形の本文を書いた。」

(き) 長保二年三月十六日 手跡を天皇に献上

「内裏に参つた。手跡を献上した。天皇の仰せによつて書いたものである。」

(く) 長保二年七月十六日 殿舎の門額を書く

「今日から殿舎の門額を書き始めた。このことは堪えられないうえに、憚るところも有つたので、去月十六日以来、そのことを奏上させた。すでに天皇の恩許は無かつた。そこで無理に書いているところである。」

(け) 長保二年八月二十五日 道長の命で和歌を書く

「命によつて、葉子六帖に和歌を書いた(葉子に古歌の意を画く。そこでその歌を書いた。)」

(こ) 長保二年十一月二十五日 色紙形を書く

「黄昏に及んで、六条宮(具平親王)の許に参つた。御仏像の色紙形を書き奉つた。」

(た) 長保二年十二月十一日 法華経外題を書く

「法華経一部の外題を書いて、(源)致道朝臣の母の七々日の法事に□□。」

(ち) 長保三年正月九日 屏風色紙形を書く

「朝、左府(道長)の許から、(橘)為義朝臣を使として、四尺屏風四帖を賜つた。すぐに色紙形を書いて、奉つた。」

(つ) 長保三年四月二十二日 法華経外題を書く

「法華経一部の外題を書き奉つた。」

(て) 長保三年十月八日 御屏風和歌を書く

「弘徽殿の東廂において、御屏風四帖の和歌十二首を書いた。」

(と) 長保四年正月十八日 経の外題を書く

「(源)濟政朝臣が伝え送つたことによつて、法華経八卷・開結経・阿弥陀経・般若心経の外題を書き奉つた。(鈍色の紙、白銀の字である。外題は黄金の字である。)」

(な) 長保四年二月十日 東三条院法事の経外題を書く

「院に参つた。明日の御法事の為の御経の外題を書き奉つて、弁命婦に渡した。」

(に) 長保四年二月十四日 経の外題を書く

「法華経一部・開結経・阿弥陀経・転女成仏経・大般若経の外題を書き奉つた。これらの経は、如源阿闍利が母氏の御為に、今月、供養し奉るものである。」

(ぬ) 長保四年二月三十日 除目清書

「内裏に参った。除目の議が終わった。(中略) 私が清書を勤めた。」

(ね) 長保四年三月四日 金光経の外題を書く

「左府の許に参った。今日、供養される金光明経の外題を書き奉った。」

(の) 長保四年四月三日 外題を書く

「花山院の許に参った。(中略) 法華経・開結経・転女成仏経が供養された。

(中略) この御経は、今朝、藏人(橘) 為経を遣わして下給された。そこで外題を書き奉った。経供養が終わって、家に帰った。」

(は) 長保四年四月二十四日 法華経外題を書く

「鈍色の紙の法華経一部の外題を書いた。金泥である。」

(ひ) 長保四年四月二十五日 法華経外題を書く

「皇太后宮が今日、供養されることになっている法華経一部の外題を書いた。」

(ふ) 長保四年五月七日 経の外題を書く

「内裏に参った。殿上において、金光最勝王経十部・般若心経一部の外題を書き奉った。」

(へ) 長保四年七月三日 法事の経の外題を書く

「頭中将の亡室の法事の経の外題を書いた。」

(ほ) 長保四年七月八日 法華経の外題を書く

「法華経一部の外題を書いた。」

(ま) 長保四年八月一日 法事の願文を書く

「故弾正宮(為尊親王)の御法事が行われた。(中略) 願文は式部大輔(菅原輔正)が作った。私は自らこれを書いた。」

(み) 長保四年八月十八日 性空像の画賛を命じられる

「花山院から召しが有って参入した。勅が有って云ったことには「書写(性空)の聖影像を(巨勢)広貴に画かせた。近頃、中書大王(具平親王)に頼んで、いささかの画賛を記してもらった。これを清書するように」ということだ。仰せを承って退出した。」

(む) 長保四年九月二十四日 除目の清書

「除目が終わって、清書を行った。」

(め) 長保四年九月二十九日 法華御八講の経を書写

「(源) 忠隆は、御八講の経を奉仕するようという仰せを賜った。第三・第六卷である。金泥二両を加えて賜った。帰宅した。「第一・第八卷は御(一条天皇)、第二・第五卷は中務宮、第三・第六卷は下官(行成)、第四・第七卷は左大臣」

(も) 長保四年十月三日 法華経を書写

「法華経第三卷を書き奉った。金字である。御八講の為のものである。」

(や) 長保四年十二月二十一日 経の外題などを書く

「慈徳寺に参った。故院(東三条院)の御周忌の恩斎会が行なわれた。(中略)私は御経の外題及び御仏・経の目録を書いた。」

(ゆ) 長保五年七月三日 内裏殿門の額を書く

「今日、初めて内裏の額を書いた。先ず紫宸殿、次に承明門である。」

(よ) 長保五年十月十四日 経の願文を書く

「左府の許に参った。明日、供養される維摩無垢称経の願文を書いた。文は(藤原)広業朝臣が作った。」

(ら) 長保五年十一月二十五日 夢に小野道風に逢う

「この夜の夢に、野(小野)道風に逢った。おっしゃって云ったことには「書法を授けよう」と。雑事を言談した。」

(り) 長保五年十二月六日 座右の銘を書く

「内裏に参った。朝餉の間において、御障子の座右の銘を書いた。」

(る) 寛弘元年正月二十六日 屏風色紙形を書く

「心神が悩んだとはいっても、左府の召しによって参った。明日、女一宮(脩子内親王)の御対面の為の四尺屏風の色紙形に和歌を書いた。」

(れ) 寛弘元年三月二十五日 源倫子、経供養

「左大殿(道長)から、北方(源倫子)が今日、仁和寺において供養される両部曼荼羅各一鋪と大般若経一部の願文を下された。すぐに書いて送り

奉った。」

(ろ) 寛弘元年四月二十六日 障子色紙形を書く

「左府の許に参った。対代の障子の色紙形を書いた。」

(わ) 寛弘元年八月二十九日 除日清書

「除目の議が終わった。(中略)清書の上卿は、源大納言(俊賢)、勘解(有国)、及び私であった。」

(ん) 寛弘元年九月二十六日 御障子の色紙形を書く

「清涼殿の御障子の色紙形を書いた。」

(A) 寛弘元年九月二十七日 法華経外題を書く

「修理大夫(平親信)の算賀の為に、法華経六部の外題を書く。」

(B) 寛弘元年十一月五日 御障子の色紙形を書く

「今朝、清涼殿東廂の御障子の色紙形を書いた。」

(C) 寛弘元年十二月十一日 寺額を書く

「皮聖(行円)の寺の額に「行願寺」と書いた。」

(D) 寛弘二年八月十四日 経の外題を書く

「仰せによって、最勝王経の外題を書き奉った。」

(E) 寛弘二年九月十七日 『往生要集』を奉る

「左府の許に参った。『往生要集』を返し奉った。新写した私の自筆を召された。そこで奉った。原本の『要集』を賜った。」

(F) 寛弘二年九月二十日 浄妙寺鐘銘を書く・御願書を書く

「左府の許に参った。木幡寺「浄妙寺」の鐘銘を奉った。内裏に参った。(中略) 御前に参った。仰せによって、御願書を書いて献上した。」

(G) 寛弘二年九月二十六日 浄妙寺鐘銘の追加

「(藤原) 貞仲朝臣が来て、鐘銘を二行、彫り損じたことを伝えた。すぐにこれを書いた。」

(H) 寛弘二年十月十八日 浄妙寺の額を書く

「左府の命によって、浄妙寺の額二枚を書いた「南は真名、西は草書」。

(I) 寛弘二年十月十九日 浄妙寺三昧堂供養の日に祝願文を書く

「日の出の頃、浄妙寺に参った。祝願文を書いた。」

(J) 寛弘二年十月二十日 大般若経の外題を書く

「内裏に参った。大般若経の外題を書き奉った。綸命によるものである。」

(K) 寛弘三年四月二十三日 仁王経を書写

「右小弁(藤原広業)が勅命によって来た。紺紙二巻を賜与された。仁王経一部を書写せよとのことである。すぐに今日から始めて書き奉った。」

(L) 寛弘三年十二月十六日 除目清書

「除目が終わった。清書は右金吾・勘解(有国)・私が勤めた。」

(M) 寛弘四年七月十二日 仁王経を書写

「内裏に参った。兵部省の丞(藤原)惟規を介して、仁王経一部を奉らせた。「仰せによって書き奉ったものである。金泥である。」

(O) 寛弘四年七月十五日 外題を書く

「藏人惟規が来て、『摩訶止観』『法華玄義』『法華文句』、合わせて三十卷の外題を書き奉るよとの勅を伝えた。すぐに書いて、自ら持って参った。召しによって、天皇の御前に伺候した。」

★ 寛弘四年八月二日 道長金峯山詣で

「この丑剋、左大殿(藤原道長)は、金峯山に詣でられた。源納言(俊賢)が御供に供奉された」ということだ。」

(P) 寛弘四年十二月二日 浄妙寺塔供養願文を書く

「晁方(中略)木幡(浄妙寺)の塔供養に参った。願文を書いた。(大江)匡衡の作である。」

(Q) 寛弘五年三月二十一日 写経・経外題を書く

「巳剋、初めて大般若経を書き奉った。これは幼少の女兒の為である。去年十二月から願を立て、今日に至って、初めて自ら書き奉った。経の料紙は重ねて法師が表装を行った。(中略) 故院(花山院)の御法事の為の法華経の外題を書き奉った。金泥の具経の阿弥陀経と般若心経である。」

(R) 寛弘五年八月十五日 道長に新写『後撰和歌集』を献上

「左府の許に参った。去月二十八日に賜った『後撰和歌集』を奉った。新しく書いたものである。」

(S) 寛弘五年十二月二十日 敦成親王百日儀

「内裏に参った。若宮(敦成親王)の御百日の儀が行なわれた。(中略)左府の命によつて、私が紙と墨を取つて参り進み、序題を書こうとしていたところ、帥(伊周)が更に書かれた。私は和歌を書いた。」

(T) 寛弘六年三月四日 小野道風の書の鑑定を依頼される

「今朝、四条大納言(公任)の御許からこの本(小野道風の仮名本二卷)が送られてきた。「真偽を定めるように」と云うことだった。」

(U) 寛弘六年五月二十三日 道長第法華三十講

「左府の三十講が終わつた。ところが、今日、大般若経が供養される。御願文を清書していたところ(後略)。」

(V) 寛弘六年八月四日 北野社・大学寮の額を書く

「北野宮の額を書き奉った。(中略)また、大学寮の額を書いた。」

(W) 寛弘七年三月十八日 内裏仏経供養

「沐浴していた頃、出納時則が御願文を持って来た。すぐに湯から上がつて、これを書いた[大江匡衡が作った]」

(X) 寛弘七年三月二十日 手本を書く紙

「東宮は(中略)私を召して、続紙一卷を賜つた。手本を書き奉ることになつた。」

(Y) 寛弘七年五月二十五日 書写した書物を左府に献上

「左府の許に参った。三十講が終わつて、御前に伺候した。内(一条天皇)から先日下賜されて書写させられた天曆八年の御記二卷・康保二年冬の一巻・『後撰集』八巻・御手本四巻を献上した。」

(Z) 寛弘七年六月十九日 写本を天皇に献上

「内裏に参った。(中略)先日、内(一条天皇)から賜つた続色紙六卷に書写したのは、『新楽府』二卷(先日二巻を献上した)・『坤元録詩』二卷・『詩合』一巻・『日記』一巻・『後撰集』五卷(先日、進上したのは八巻)である。『村上御記』の天徳四年夏の巻を書いた。(藤原)惟規に託して奏上させた。」

(1) 寛弘七年七月十五日 禄を賜る

「内裏に参った。殿上間に伺候した。頭弁が云つたことには「屏風の事によつて禄を下給することになりました。参入したら事情を奏上するよう、先日、勅命がありました。」と云うことだ。」

(2) 寛弘七年八月二十八日 除目の議・清書

「除目の議が終わつた。(中略)今夜、清書が行われた。下官(行成)がこれを奉仕した。」

(3) 寛弘七年十月二十八日 書物の外題を書く

「左府の許に参った。『蓮府秘抄』十一帖(外題である)を書いた。「内(一

「条天皇」の分として献上されることになっている」と云うことだ。」

(4) 寛弘八年五月二十日 一切経の外題を書く

「天皇の御願の一切経の内、三百巻ほどの外題を書き終わった。これを奉献させた。」

(5) 寛弘八年五月二十一日 御願文の清書

「今日、公家（一条天皇）は一切経を供養された。昨夕、御願文を賜った。」

(大江) 匡衡朝臣が作ったものである。今朝、清書して奉らせた。」

(6) 寛弘八年六月十三日 東宮上表文を清書

「御讓位が行われた。私は昨日から病悩していた。辰剋、勘解由判官平雅康が来て、東宮の令旨を伝えた。(中略) 御表を書き奉るようにといいことである。(中略) すぐに清書して献上することを申させた。(中略) 清書が終わると、病悩は頗る宜しかった。」

(7) 寛弘八年八月二日 一条院御願文

「故院（一条院）の御法事が行われた。(中略) 平明範が、一条院から御願文を持って来た。(式部大輔(大江) 匡衡朝臣が作ったものである。鈍色の紙、五、六枚を加えた)。そこで清書していたところ、作者(匡衡)が来向して所々を削り改めた。」

(8) 寛弘八年八月十一日 故一条院七々法要の御経を書く

「今朝、御経を持たせて、一条院に参った。この御経は下官が(その一部を書いた)。」

(9) 寛弘八年九月十五日 法華経の外題を書く

「今日、右府(藤原顕光)の許から法華経五部を賜った。これは尚侍が行われる八講の分であると云うことだ。羅の表紙であったので、泥で書き奉った。(金泥で三部、銀泥で二部)。」

(10) 寛弘八年十一月八日 不動尊像に頌偈を書く

「枇杷殿に参った。左宰相中将(源経房)と南陣の下で遇った。おっしやっで云うことには「御不動尊像の下にいささか頌偈を書いてもらいたいのです」と云うことだ。(中略) 明日、書き奉るということに答えた。」

(11) 寛弘八年十一月二十九日 故冷泉院五七日法事

「故冷泉院の五七日御法事が行われた。(中略) 御願文(中略) 清書を送り奉った。」

(12) 治安元年十二月一日 道長、無量寿院西北院供養願文の清書を命じる

「今日の夕方、左小弁(藤原) 義忠朝臣が、入道殿(道長)の御使として到来して、云ったことには「明日の願文を、夜の内に書いて送ってくるよ」といふことだ。明朝に書き奉るということに申させた。」

(13) 治安二年七月十二日 法成寺願文の清書を命じられる

「式部相公(藤原広業)が願文を持って来た。「入道殿の命によって清書するように」と。」

(14) 治安二年七月十三日 願文を清書

「早朝、御堂に参った。午剋の頃、退出した。願文を清書した。(藤原)実経に託して、奉献させた。」

(15) 治安二年七月十四日 法成寺金堂供養

「早朝、額を書いた。入道殿から大膳亮親任を遣わして、金泥の法華經一部を賜った。すぐ外題を書いて、これを奉った。巳剋、額を書き終わった。人夫に随って到来し、奉献させた。」

(16) 治安三年閏九月十九日 彰子、屏風に和歌を書くように命じる

「大宮(藤原彰子)の許から亮(源)濟政朝臣を遣わして、令旨が有った。「来月の御参賀の為の屏風について、すぐに三帖を、先ずは賜う(和歌を添えてあった)。加えて賜った他にまた、『古今集』の和歌を書くよう、申されているということである」と。」

(17) 治安三年十月一日 屏風和歌を書き始める

「御屏風を書き始めた。」

(18) 治安三年十月十二日 経の外題を書く

「(藤原)保相朝臣が来て、御屏風を乞うた。一昨日、(丸部)兼善宿祿が大夫(源俊賢)の書状によって、明日の御経(十卷)を持ってきた。外題を書いて、奉献させた。(藤原)実経が大宮(藤原)彰子の仰せによって、明日の御願文を持って来た。」

(19) 治安三年十月十三日 源倫子六十歳参賀・願文の清書

「願文を清書した。(中略)御願文を書き終わった。実経に託して献上させ

た。」

(20) 万寿元年六月二十六日 法成寺薬師堂供養・願文を書く

「法成寺薬師堂供養が行われた。(中略)願文は文章博士(慶滋)為政朝臣が作ったものである。その多さは『千字文』より過ぎていた。巳剋の頃、書き終わった。先ず、これを奉らせた。」

八、藤原行成の書と経筒願文

藤原行成の日記『権記』そのものの文字量は極めて膨大である。そこに記された「書」に関する記載もご覧のとおり数多い。八十五件もある(実際はそれ以上だ)。その内容を通観すれば、当時の藤原行成の立場の一部が「美しい文字を書く人」というものであったことが明白である。行成の歴史的評価は「能吏」であり「能書」だ。行成の書を分類するならば、まずは公務であるところの朝廷の「書類を清書」することである。除目(人事)の清書をはじめ陣定など役所の書類の清書が多かった。その仕事のすべてを権記に書き残したわけでもなからう。公務で出仕した日にはほぼ当然のように仕事として書いたであろう。美よりも正確さが大事であっただろうが、書類が美的であることに越したことはない。また公的というならば内裏諸堂の「額字」(紫宸殿・承明門・大学寮)を書くのもそれにあたる。また入宋僧念求に書状を託した際には左大臣道長の書状を行成が清書しているが、これも公務にあたるようだ。

美的なものとしては屏風の「色紙形」の清書が目立つ。藤原彰子入内の際の四尺屏風に貼り込まれた色紙形の和歌の清書は著名だ

(う)。和歌ならばひらがなで、漢詩であれば漢字で美麗に書いたのであろう。さらに「書物」類の清書（漢詩文・天皇御記・往生要集など）を一条天皇や道長から何度も頼まれているし、自ら書いて献上もしている。書物の外題だけ書く場合もあった。また道長の長男頼通のために「手本」も書いている。

仏事に関わるものでは法華経などの経巻の「外題」（「妙法蓮華経巻第一」とか）を書くことがたいへん多かった。また仏画の「賛」。法華経そのものの書写など。加えて寺院の法要にとりまなう「願文」の清書。梵鐘の「鐘銘」（浄妙寺鐘。これが経筒銘文に最も性格が近い。行成の清書は下書きであり、文字は鋳型に転写されて鋳造された。浄妙寺鐘は現存しない）。社寺の「額」（浄妙寺・法性寺・行願寺・北野宮・法成寺）の清書などである。

行成に清書を頼んだ人物はまず左大臣道長が筆頭であり、一条天皇も公的私的に度々、花山院、右大臣藤原顕光、道長の長女藤原彰子などである。その他の貴族や僧侶からも頼まれている。

私的にはもちろん膨大な『権記』の記載も「書」である。また夢に小野道風に逢って「書法を授けよう」と言われている（ら）。道長からは道風の仮名手跡二巻を借りて研究している。また大納言藤原公任からある仮名本が道風の書か否かの鑑定も頼まれている（T）。行成自ら小野道風の書を研究し、「書」に対して常に修練邁進していたことが分かる。

『権記』の記載からは藤原行成の清書はかなり速く書かれたように感じる。数日とか時間をかけて丁寧にも練り直した感じではない。依頼されて「すぐに書いて渡した」という記載があちこちに見られる。大事な願文の清書依頼に対してもスピード感をもって書

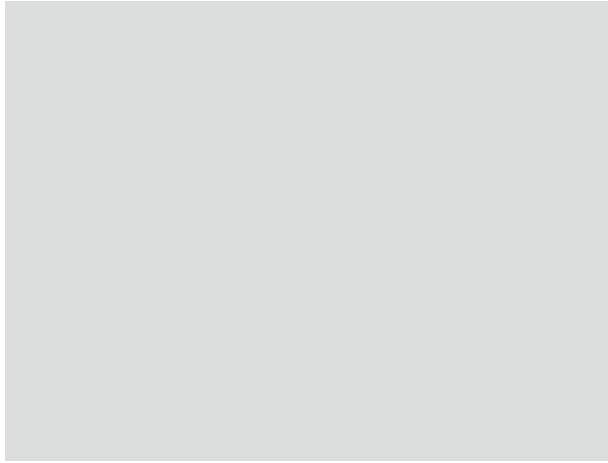
いていたようだ。

このように『御堂関白記』や『権記』を読めば、藤原行成は長徳元年頃から晩年の万寿年間にかけて、ほぼ三十年に亘り京都の宮廷で（つまりは日本国で）書の第一人者であることを自らも認め、研鑽を重ね、さらに他者からもそうだと認められている状況であることが分かる。それは現代的な評価ではなく、当時の評価である。

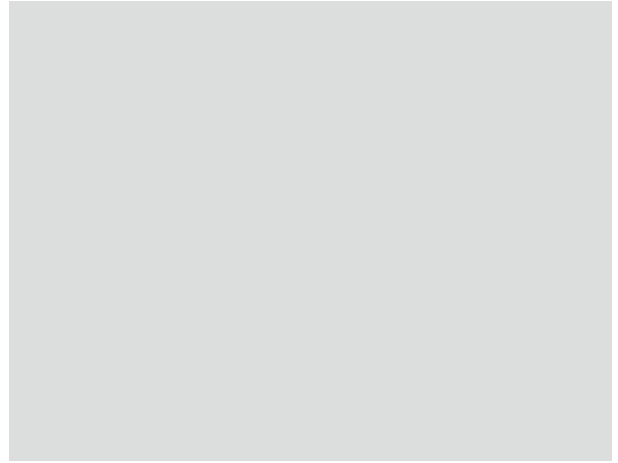
『御堂関白記』には道長が行成以外に清書を頼んだ記載はほぼ見られない。道長にとって何らかの清書を頼む場合はその相手が行成であることがほとんどなのである。すなわち金銅藤原道長経筒の「願文」の文字を行成ではない者に依頼することのほうが特殊である。逆に行成に頼んだからこそ「日記に記すまでもなく当然なこと」だったのではなからうか。

現代に生きる我々は行成の『白氏詩卷』や『本能寺切』などを和様の書の至宝として極めて大切にし、鑑賞し、手本としている。言い換えれば書聖行成の作品として神格化している。しかしながら平安時代の記録を見れば、現存するのは行成の作例の数千分の一、或いは万分の一である。現在に残る彼の作例のひとつに（工人が経筒に写し刻んだものではあるが）この「金銅藤原道長経筒の銘文」をあらたに加えることは、現代的には、すなわち書の世界的には、極めて甚大なことではある。しかしながら平安時代当時を遡って考えれば、至極当然のことであり、特段驚くほどのことではないというのが筆者の考えである。

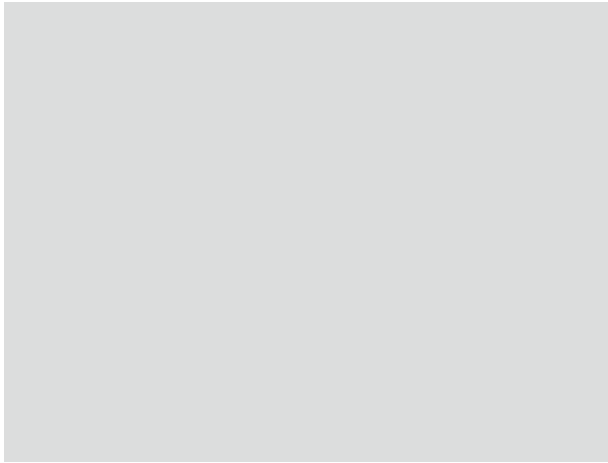
改めてこの経筒文字を書く可能性のある人物を列挙してみよう。



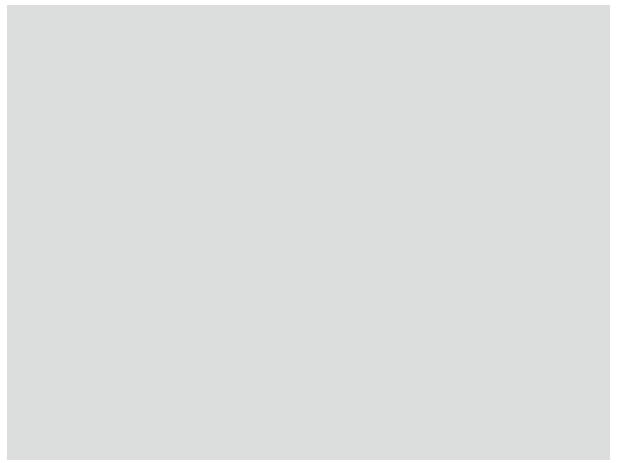
D 銘文後半「舍利仰釋尊」



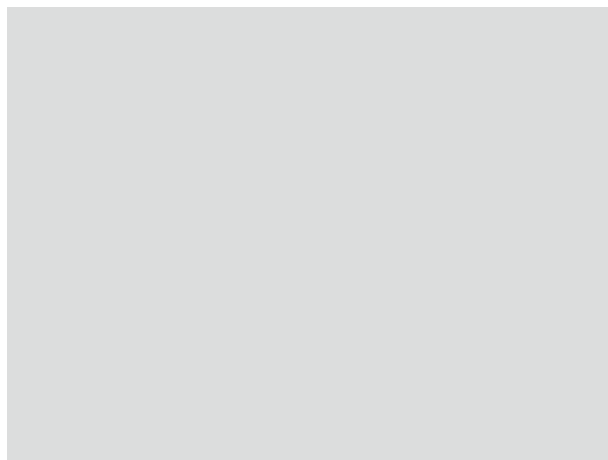
A 経筒銘文の冒頭「南瞻部洲～」



E 「道長」「寛弘」「國左大臣」



B 「寛弘」の「弘」の異体字



F 底面中央の「伴延助」



C 「翰墨工藝～」

挿図5 道長経筒の銘文細部

① 一条天皇

② 藤原道長（左大臣正二位）

③ 藤原行成（参議左大弁正三位）

④ その他の公卿（藤原公任・中納言従二位とか）

⑤ 道長の家来で行成風の字が書ける者

⑥ 経筒の発注を受けた工房の工人

まず①の一条天皇であるが、臣下である藤原道長の私的な仏事の願文を天皇が清書するとは考えにくい。一条天皇は長保四年九月に内裏でおこなわれた法華八講のために法華経卷一と卷八を自ら書写している（め）。また社寺の額などは宸筆であることも考えられよう。しかし国家や自分の為ではない左大臣の願文を清書することは無いだろう。

次に②の道長自筆説である。自らの宗教行為の願文を自筆することとは当然のようにも思える。古く石田茂作が『金峯山経塚の研究』の中で経筒の銘を「書体は甚だ流麗で書聖行成の手になれるかとも思われる位であるが、道長にしたところで筆蹟なかなか優れて居れば、矢張彼の下書きによって鏤刻したと見るが穩当かと思う」と記している。現在、道長筆かと思える研究者はこれをベースにしているようだ。¹²『御堂関白記』の道長の自筆記載はあくまでも日記なのでとくに美意識を発揮しているものではない。知られているとおりのラフな文字だ。また経筒に入っていたとされる現存する道長の紺紙金字経（東京国立博物館所蔵品や五島美術館所蔵品）を見れば美的である。心を込めて丁寧に写経したように感じられる。しかしながらその文字は「流麗」にはあたらないのではなからうか。道長自身

は寛弘四年十二月十日に「従本非能書度々難示」（私は元々、能書ではない。度々、自分には無理であると伝えたのであるが）（ル）としながらも法性寺の寺額をしぶしぶ書いている。また自筆の方が良いはずの念求に託した宋への書状を行成に清書させていることから、道長は自分の字に自信はなかったと見るべきだ。金峯山参詣と同じ年の寛弘四年の浄妙寺塔（藤原氏先祖墓地を供養する寺院）の供養願文を自分ではなく行成に清書させていることから「後世に残る字は行成に書かせる」が道長の基本であったようだ。

③の藤原行成説は、筆者が本稿で主張していることだ。日記を読めば行成自身は願文や色紙形など様々な清書を頼まれることを特に嫌がっているふうではない。左大臣からの度重なる清書の依頼を、上司から命じられた仕事としてではなく、ごく当然のように書いている。それは当代随一の能書家であることの自負心の表れと考える。一番上手い自分が書いて当然なのだ。もしも左大臣が金峯山参詣のような重要な行事の「願文」を自分以外の誰かに頼んで清書させたと行成が聞いたならばプライドが傷つくのではなからうか。

④行成以外の公卿に頼む場合だが、身分が高いということでは可能性があるかもしれない。他の貴族の文字は残りにくいだが、例えば藤原公任（寛弘四年当時は中納言）自筆の『稿本北山抄』の文字と道長の経筒の文字を比べれば明らかに個性が異なるように見える。道長は若くして左大臣になったので道長より年長者の公卿（右大臣藤原顕光や内大臣藤原公季、大納言藤原道綱、権大納言藤原実資ら）も多かった。藤原公任と道長は同い年である。道長より六歳下の行成には頼みやすいだろうが、行成以外の大臣・公卿にわざわざ頼む理由が思い浮かばない。

⑤また藤原行成風の書体が当時の宮廷で流行していたとみなすならば「この経筒の文字は当時の『流行の様式』であって行成ではない」との考え方もできるだろう。しかし、仮に道長の家来で能書者（左大臣家には必ず書類を書く書記のような家来がいたはず。行成風の字が書けたかもしれない）が書いたとしたならば、まず、釈迦や弥勒や蔵王権現に対して礼を欠くことであろう。字の上手下手が問題ではなく、書した者の身分が低いことが問題である。さらに行成を差し置いて家来に書かせたことも問題となる。命じた道長に悪気は無くとも、結果として「道長が行成よりも家来の字の方を上に見た」という評判になるのではなからうか。

⑥経筒を作った伴延助の金属工場の職人（あるいは伴延助自身か）が、願文の下書きを横に置いてそれを見ながら経筒に、丹精込めて刻んだ場合である。しかしこれも考えにくいことだ。工人の文字ではありえない。かならず清書された願文の紙を経筒の表面に糊で貼り付けて、その文字を削るようにして経筒の表面に刻んだはずだ。願文の清書を工房の職人が行なうものだろうか。それこそ問題だ。また下書きの筆跡を無視して工人が適当に字画を変更して刻むこともあり得ない。与えられた清書の文字を正確に写し刻むことを求められたはずである。

経筒に刻まれた願文の後半部に「そもそも一樹の蔭に憩い、一水の流れを飲むもなおこれ小縁ならずや。いわんやこの道俗若干人、あるいは香花手足を以てこの善にあずかる者あり。あるいは翰墨工芸を以てこの事に従う者あり。」（挿図5C）と刻まれている。工芸とは経筒などの捧物を作ること。経巻の装丁を行うものが含まれよう。そして「翰墨」の二文字に文字の関係者すなわち「願文を作文

した者」（文章博士の大江匡衡か）¹³そして「願文を清書する者」が含まれるであろう。

道長の金峯山参詣には多くの貴族が同行した。その筆頭は権中納言源俊賢（道長の妻明子の兄）である。その他は長男頼通、そして受領層である中級貴族が多かった。しかしながら藤原行成は道長の金峯山参詣には同行していない。その意味がすなわち「（金峯山には一緒に登らなくても）翰墨工芸を以てこの事に従う者あり（その者もこの行事に結縁する者である）」となるのであろう。願文には道長以外の人名は登場しないが、あくまで金峯山参詣の本意を持った藤原道長が願文の主人公である以上、それで良いのであろう。

寛弘四年の金峯山参詣の意義に戻るならば、道長にとって長徳四年以来の念願であり、結果的に一生に一度のことであった。¹⁴ そのような重大かつ盛大な宗教行事に手抜きなどはない。すべての作業・準備・奉納品の作成に当代の最高・最上を込めることが不可欠だったはずだ。いわゆる「作善」である。経筒表面に刻まれた願文も千年後に博物館で展示されて読ませるための文字ではない。釈迦・弥勒・阿弥陀・蔵王権現など神仏に奉じて読んでいただくためのものである。すなわち当代最高の能書家である藤原行成に清書させないはずはないのだ。¹⁵

道長経筒の銘文を藤原行成が書いたものであることを前提に見ると、反対に見えてくる問題もある。経筒の文字を改めてしげしげと眺めるならばいふんと丸みを帯びた「優美な」文字に見える。しかし現代人の目にはいくつか疑問に思える文字も存在する

たとえば末尾の年号「寛弘四年」の「弘」の弓偏である（挿図5E）。よく見ると楷書の「弓」の字画を無視してによると蛇行した

ものになっている。これは草書の「弓」にある字体だ。「弘」そのものは文字のバランスは取れており下手ではない。また寛弘の右側の「子道長敬」の「道」の字などもよく見ればいぶん変な形である(挿図5E)。三画目の左側が極端に長い。しんによう(二)の形も不思議だ(しかし「道長」と二文字で見ればバランスが取れている)。挿図左側の「大日本國」の「國」の字も異体字の草書のようだ(或の口をムとするもの・挿図5E)。また銘文二行目なかばの「寛弘四年」の弘は「ム」を「口」とする異体字だ(挿図5B)。寛弘の「弘」に二種類の文字が使われたのだ。さらに秋八月の「秋」も偏と旁が左右入れ替わった異体字である。京洛の「京」も中の口が日となっている。

現代人には書体の混在ではないかと思えるこのような文字の使い分け、清書のあり方も行成ならではの技巧を凝らした美意識の発露だと考えられる。一見おかしいように見える表現からも行成の書だという答えに近づいていくようだ。道長も行成が書いてきた願文の清書を見て「これでよし」という以外の返事はなかったであろう。行成に全幅の信頼を置いていたからに他ならない¹⁶。

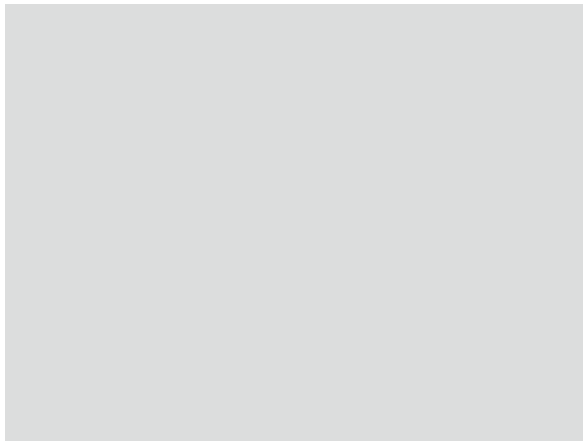
経筒の文字全体を改めて藤原行成清書の願文だとして見渡すならば、一条朝当時、行成が数多く書いた仏事などの願文の形式が見えてくるように思う。

九、経筒の文字が示す意義

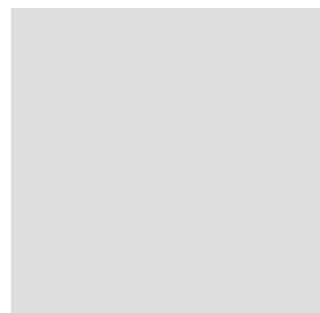
本稿では道長の経筒の文字が行成であるか否かにこだわって論を進めたが、じつは要点はそこにあるのではない。日本人が和風の書

を完成させ、それを経筒銘に残したこの時代の美意識のありかたの方が重要である。経筒の文字をよくよく見ればそこに「日本的な美意識の発露」が感じられるはずだ。

挿図6は京都国立博物館が大阪四天王寺から寄託を受けている国宝威奈大村骨藏器の表面に刻まれた銘文の一部である。飛鳥時代終わり頃、慶雲四年銘を持つ。西暦だと七〇七年、奇しくも道長経筒のちようど三百年前の墓誌銘(追悼文)である。その文字は大陸風・唐風のかっちりした字画であり、字画の転折(右肩)も丸くない。一見して道長経筒の文字とは異なる。この三百年の間に日本では古墳時代以来、学び、受容し、字形を模倣してきた中国の漢字(中国文化そのもの・八世紀初頭の威奈大村骨藏器の墓誌銘がその受容模倣の典型例)を消化し、日本的に変化させ、日本人の感性に合致するように美的洗練作業(改変)を行ったのだ。その代表者が小野道



挿図6 威奈大村墓誌銘(部分・四天王寺蔵)



挿図7 文字の比較(3)

風と藤原行成である。「日本的な書」とは何か、それはまた難しい課題なのだが、考えるよりは『本能寺切』などをじっくりと見ることによって感じとれるものではなからうか。

あえて文章で表現するならば、隋唐代の古典的な漢字の筆使いとは異なる筆法で、すなわち仮名を書く手の動きまで取り入れて漢字を書いているということだ。本能寺切や道長経筒の文字の最大の特徴は転接のなんともいえない緩やかな丸みである。転接部だけでなく文字全体も丸みを帯びている。いわゆる「草書」の漢字でもない。これは仮名の影響だとされる。⁽¹⁷⁾

経筒銘文の終わり近くにある「神力圓」の「力」は現代ひらがなの「か」の「丶」を取り払ったものしか見えない(挿図7右中)。また本能寺切第四十八行目の「飽氣力」(挿図7左下)の「力」も同じだ。こんなに力のない「力」で良いのだろうか。⁽¹⁸⁾じつにひらがな的な漢字だ。

唐の歐陽詢や褚遂良らの隙のない厳格な漢字書体を見たあとで、道長の経筒の文字を見ればおのずとその差異は明らかだ。仮に中国唐代の書家がこの経筒の文字を見たならば「漢字の筆法の基本が壊されている」と思うのではなからうか。本来の中国的な筆使いが骨抜きにされて、仮名的運筆の回転運動が漢字の筆線の中に浸入してきているのだ。それは十一世紀初頭の平安京において、漢文漢詩に造詣の深い行成を含む貴族たちが、公的な文章は漢字で書きながらも、和歌や消息を仮名で書いていた結果である。この時代に現在のような漢字仮名混じり文はほとんどない。公的には真名(漢字)、私的には仮名を書いていた書家が、仮名の形や運筆の影響を受けて「漢字の新たな書体」を創造完成させたといえるのだ。藤原行成の

文字が現在の日本人に「優美」に見える理由は、仮名のもつ細く柔らかな筆線の要素が「漢字」に染み込んでいることを直感しているからに他ならない。日本人的な審美眼で行成の字を見ているのだ。平安時代の美意識の根本が彼の書いた文字に最大限発揮されているのである。後世の我々は行成の字をとて優美だとは思っている、厳格だとか力強いだとか雄大だとか端正だとか威厳に満ちたなどとは全く思わないのは、中国の漢字のかたちこそ借りているものの、文字に表れた字画や描線の美意識(精神)は中国の漢字からはるかに遠ざかり、まことに日本的な美意識、すなわちゆるやかでやさしい細い線、回転する曲線からなる仮名の特性と美の規範が行成の書く漢字の中に取り入れられていることを無意識に看取するからである。博物館で展示された『白氏詩卷』や『本能寺切』の前で現代の日本人がため息をつきながら鑑賞するのにはそんな理由があるのだ。その描線の細さ柔らかさは、降って十二世紀に「鳥獣戯画」の兎や蛙の軽やかな筆線にも及び、さらには手塚治虫の描く漫画やゆるキャラも広い意味ではその末裔なのである。

本稿で長々と道長の経筒の文字にこだわって述べてきた本当の理由がここにある。すなわち行成か否かはさておき、経筒の文字もつ日本化した漢字(日本的書体・和様の書)が、時の最高権力者である藤原道長が作らせた金銅製の経筒に刻まれ、それが釈迦や阿弥陀や弥勒や蔵王権現に捧げられたことが重大なのである。道長の時代の最先端の美そのものなのだ。

おおまかには平安時代に於ける「国風文化の醸成」などと解説されることが多いのだが、その代表がこの道長の経筒だ。そして平安時代なかばに確立したいわゆる「日本的な美意識」は千年後の現在

にまで大きな影響を及ぼしているのである。¹⁹⁾

金銅藤原道長経筒、これこそ日本。国宝の中の国宝である。

〔註〕

- 1 京都国立博物館『藤原道長―極めた栄華・願った浄土―』特別展覧会図録 二〇〇七年
- 2 石田茂作・矢島恭介『金峯山経塚の研究』帝室博物館学報八 一九三八年
- 3 道長経筒などの埋蔵場所であるが、大和文華館所蔵の「大峯山全図」(江戸時代)の山上平坦面に「経塚」と書かれた方形の土壇が描かれている。元禄の山上本堂改修以前の図かとみられるもので、この土壇が主要な埋蔵地、すなわち道長とそれ以降の藤原氏長者らの経箱なども埋めた場所であったと推定される。現在の山上本堂の前面平坦地にあたるのであろう。ここに描かれた「経塚」には灯籠は立っていないようだ。註1文献の71図。
- 4 鍵のことに触れたのは同じ金峯山から出土した金銀鍍唐草双鳥文経箱には海老錠が、比叡山横川から出土した上東門彰子奉納の金銀鍍宝相華文経箱にもからくり式の鍵が付いているからである。注意すべき問題だ。
- 5 奈良国立博物館編『経塚遺寶』東京美術 一九七七年
- 6 伴延助の工房の制作技術が高かったことについて記して置こう。経筒の蓋は被せ蓋だが、その密閉度は高い。蓋をはめる際には空気の漏れる音がシュツと鳴るほど隙間がない。工学的な真円ではないので蓋と身があう場所が円周の一方所だけしかない。蓋と身を合わせる際にその正しい位置がどこか分かるように身の口縁部と蓋の口縁部の各一ヶ所にほんのわずかな切込みによる目印がある。その場所を上下で合わせないと蓋は正しく閉まらないのだ。千年前の金工職人の工夫が現代の学芸員も助けてくれる。
- 7 国宝「本能寺切」は京都本能寺に江戸時代以来伝えられてきたもので、題箋に「権跡」とある。小野篁(野相公)、菅原道真(菅(漢)丞相)、紀長谷雄(紀納言)の漢文の一節を楷書・行書・草書で記したもので

ある。書の手本として書かれたとされる。料紙には唐草と鳳凰文が刷られた中国製の高級紙を用いている。縦二九・四cm、横一八八・二cm。道長経筒の文字と比較対照したのはおもに中盤の「漢丞相」(菅丞相)の部分である。

中央公論社『書道藝術 第十五巻 藤原行成』一九七五年

8 筆跡鑑定に関しては歴史や美術の問題とは遠いようにも思っていたが、すこし調べてみると重要な観点が多いと思う。筆者が参考にしたのは、魚住和晃【著】『筆跡鑑定ハンドブック』三省堂 二〇〇七年、である。

9 『御堂関白記』も『権記』も近年、全現代語訳が出版され、その内容を平易に読むことができるとも有難い。しかしざっと目を通すだけでも時間がかかるほどの大部である。『権記』については「書」に関する記述に見落としもあるように思う。

倉本一宏『藤原道長「御堂関白記」全現代語訳』上中下 講談社学術文庫 二〇〇九年

倉本一宏『藤原行成「権記」全現代語訳』上中下 講談社学術文庫 二〇一二年

10 『御堂関白記』には経筒願文の清書を行成に依頼する記述は無い、と述べたが、寛弘四年正月〜七月までの記載を読んでも金峯山参詣に関する記事は乏しいのが実情だ。閏五月十七日に源高雅宅に移って金峯山参詣(御嶽詣)のための精進に入ったという記述と、六月八日に弥勒の聖地である笠置寺(現京都府相楽郡笠置町)に参詣した記事がある程度である。すなわち大変な準備であったはずの金峯山参詣の準備段階の記載を道長はほとんど書き残していないのだ(寛弘四年正月〜六月の自筆本はない。記載も少ない時期だ)。一方、八月二日から十四日までの実際の金峯山参詣の行程は比較的詳しく記している(自筆本が現存)。「御堂関白記」に記載されていないから違うという論は成り立たないと考える。

11 平安宮の宮殿内裏諸堂の額字を書くのは当代きつての能書の仕事であった。平安初期からその揮毫をした人物を列挙するならば、弘仁九年(八一八年)には嵯峨天皇・空海・橘逸勢が宮城の門額を書いた。応和元年(九六一年)には小野道風が宮門・殿舎の額を書いた。貞元

二年（九七七年）には藤原佐理が宮門・殿舎の額を書いた。そして長保二年（一〇〇〇年）には二十九歳の藤原行成が宮門・殿舎の門額を書いたのである（く）。そのちでは延久四年（一〇七四年）に源兼行が大極殿の額を書いた。天永二年（一一一一年）には源俊房が春華門の額を書いた。こう見ると、「道長経筒の願文」が制作された寛弘四年（一〇〇七年）には藤原行成の能書としての地位名声はすでに確固としたものであったといえる。「日本書道史年表」「書道藝術別巻第四 日本書道史」中央公論社 一九七七年より。

余談だが、藤原行成が書いた法成寺の「寺額」（無量寿院）を三百年後の鎌倉時代末に吉田兼好が見ている。『徒然草』第二十五段より

〔前略〕京極殿・法成寺など見るこそ、志留まり、事変じにけるさまはあはれなれ。御堂殿（藤原道長様）の作り磨かせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ、御門の御後見、世の固めにて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんとはおぼしてんや。大門、金堂など近くまでありしかど、正和の比、南門は焼けぬ。金堂は、その後、倒れ伏したるままにて、とり立つるわざもなし。無量寿院ばかりぞその形とて残りたる。文六の仏九体いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、（源）兼行が書ける扉、なほ鮮かに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども、未だ待るめり。これもまた、いつまでかあらん。かばかりの名残、だになき所々は、おのづから、あやしき礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。（後略、傍線筆者）
書家の植村和堂は道長の経筒の文字を次のように記している。

「経筒の銘文は現品を見ても、拓本で見てもいかに細くてよく見え難いが、諦視すると実に見事なものである。大まかで、のびのびとして、しかも和様独特の風格を十分具えて、心憎いばかりの出来映えである。銅板経や、瓦経にもなかなかいい手があるが、これはさすがにそれらをグンと抜いている。ペン字の正本として何回か習ってみたら、性急な悪癖のついている現代のわれわれには、息が続かないくらい悠々寛々たる書き振りで、まことにいい参考になる。筆者は道長か、行成かのいずれかであろう。その真跡と比較して各自で推定して見られる事をお勧めする。」

講談社『日本書道大系3 平安（二）』一九七一年 95頁

13

銘文の文字の筆者を検討してきたが、その文章を書いたと推定した大江匡衡（九五二―一〇一二）のことに触れておきたい。大江氏（江氏）は菅原氏と並ぶ学問の家柄である。匡衡は東宮学士・文章博士・式部大輔など。また尾張守・丹波守も勤めた。妻は歌人で『采華物語』の作者とされる赤染衛門。一条朝に数多くの作文をしたことは『御堂関白記』や『権記』に詳しい。大江匡衡作文・藤原行成清書の組み合わせは枚挙にいとまがない。大江匡衡の文例は『本朝文粹』に所収されている。

14

道長は寛弘四年八月の金峯山登山のあと、寛弘七年にも金峯山参詣を計画した。しかし諸事情により中止されている。

15

文字のすべてが行成の下書きか、となると一部には問題となる部分がある。まず蓋の側面に刻まれた梵字である。すべて双鉤体で刻まれている。梵字に美文字があるかは分からないが、あるいは僧侶の字なのかもしれない。また行成が書いたかもしれない。次に底面中央部に刻まれた「伴延助」の三文字（挿図5F）であるが、その書体は丸みを帯びている。しかしわざわざ行成が作者の名前まで下書きを用意するとは考え難いので、これは伴延助自身かその弟子の字とするのが妥当だ。さらに気になるのは側面願文の末尾の「寛弘四年八月十一日」の十と一である。この日付の二文字はやや中軸をずらして右に出ている。違和感ある配置だ。経筒の文字が下手に見える一因がここだ。筆者の想像だが、行成がこれを清書した段階（八月の金峯山登山の二ヶ月ほど前、六月頃に道長から依頼されたであろう）では日付の部分は空白だったのではなからうか。山上での埋経祭儀の日は諸事情を勘案して最終決定されるが、およそ八月上旬とまでは決まっていたものの願文清書が依頼された段階では未確定だったので、行成はこの部分を空白にして清書を提出したのだろう。「十一」の二文字は日程が確定した段階になって道長宅から伴延助の工房に連絡が行き、そこだけが行成の文字でなく、工房の職人がそれらしく刻んだのではないかと考える。

「十一」の二文字がやや中軸を外して右にはみ出している理由をそう考える。（深読みするならば、工人はわざわざ中軸を少しずらして「十一」を右に出して刻んだのではなからうか。当代一の能書藤原行成の字と問

違われないようにという意識がそこにあったのではと想像する)

一条天皇―後一条天皇の時代に藤原道長政権が安定して続いたこと、そして道長の部下であった藤原行成がほぼ三十年の間、書の第一人者であったことは後世に大きな良い影響を与えたと同時に、悪影響も与えたのではなからうか。行成の『権記』を読むにつけ、彼の書の膨大さに驚く。それは和様の書の完成形、真似るべきお手本として、行成風ではない書風を壊滅させてしまったように感じる。筆者がそう思った一例が『南山城の古寺巡礼』展に借用展示した禅定寺文書のうち「平崇上人行業記」(重文)の文字である。寛弘二年(一〇〇五年)のもので、経筒作成のわずか二年前のものだが、その文字は行成風からは程遠く、どちらかといえば藤原佐理風かと思えるような奔放な筆遣いであった。歴史にもしくはないが、仮に藤原佐理が長生きし、彼の書風の方が日本書道のお手本となっていたならば(政治的には道長の甥の藤原伊周政権が成立していたならば)、その後の日本美の概念は違う展開もあったのではなからうか。それは歴史の偶然なのか必然なのか。思うところは大きい。藤原行成を書聖と仰ぐ美意識の弊害も考えておきたい。こう書きたくなるほど彼の書の影響が強かったということである。京都国立博物館『南山城の古寺巡礼』特別展覧会図録二〇一四年

藤原行成の書より前にどのように仮名が生まれ、普及し、確立したのかは実は美術史上の重大な研究テーマである。仮名は奈良時代の万葉仮名にはじまった。その頃から日本語を文字でどう表現するかを模索していたのだ。降って醍醐天皇の時代、紀貫之が『古今和歌集』を撰し『仮名序』(延喜五年・九〇五年)、また『土佐日記』を書いたあたりに仮名(ひらがなのようなもの)の標準形が確立したとされる。そして十世紀には仮名の美的洗練も行われたのだ。それが十一世紀初頭の一条天皇の時代には本来の漢字(真名)にまで仮名のもつ美意識が浸透したというのが本稿の主題である。しかしそれ以前の仮名文字の成立と変遷の研究は筆者の手にあまることだ。おそらく仮名文字を作りだした、九世紀から十世紀前半代あたりに「日本的な美の成長期」があったのであろう。掘り下げるに値する重要な問題がこの辺りに隠れているようだ。

本稿を記しながら挿図の作成をしていたが、それを作る度に身近な人たちに見せた際の反応が実に興味深い。ほとんどの人が同一の文字を見比べて「その差異」の方ばかりに注目して「違ふと思います」という判断を下すことだ。人は「微細な違いを認識・指摘する能力にとっても長けている」ということが良く分かる。いくら字画の角度の共通性などを指摘しても、最初に下した「違ふ」という判断が脳内を占めているので、筆者の熱弁を胡散臭そうな表情で聞いているところがまた面白い。人間の認知能力とは目鼻口がほぼ同じような場所に付いている人の顔を瞬時に誰それと判別することができるほど高度だ。一方、このような筆跡の異同を判断する場合も、細部の差異は敏感に分かるのだが、文字全体がもつ同一筆者ならではの「共通性を認識すること」の方が極めて困難だということも分かってきた。人は物を目で見ているのではなく、脳で見ているのだ。これは歴史や美術・書跡の問題ではなく、人が物をどのように見ているのかという認知的な問題でもあったらしい。道長経筒の文字はこの方面からのアプローチも可能な題材だと考える。

筆者が以前『学叢』に書いたのは上東門院奉納の金銅製経箱の文様をめぐむ問題であった。上東門院(藤原彰子)は道長の長女にして一条天皇の皇后、後一条天皇の母であった。上東門院の経箱(長元四年・一〇三一年)は比叡山横川で出土したもので、延暦寺が所有し京博が寄託を受けている。論文には「和風文様の起源」という副題を付けたが、それも今回の話と無関係ではない。筆者がこのように平安時代なかばの作品を取り上げてその意義を強調する理由は、もちろんここが京都国立博物館だからである。

宮川禎一「上東門院経箱の内面文様をめぐって―和風文様の起源―」
『学叢』第三十五号 京都国立博物館 二〇一三年

〈追記〉

本文では書けなかったことを少し記して置きたい。まず平安時代の美術における「書」の位置の問題である。現代の美術認識では絵画が大多数で、

書は相対的に割合が小さいようである。しかしこの平安時代なかばでは美の根本は倭絵でも仏画でも仏像でもなく「書」であったように感じる。美術と言えばピカソやフェルメールの絵画を思い浮かべがちだが、それは現代の価値観である。『源氏物語』では女性の評価を字の上手下手で表現している。真名・仮名を美麗に書くこと。上手な文字が美の価値観の中心にあった時代だったらしい。では「上手な字」とは何か？この問題が一番難しい。筆者が身近な人たちに「字が上手というのはどういうことですか？」と尋ねた際の皆の困惑した表情が物語っている。たしかに人は上手な字と下手な字を的確に見分けて、異なる人間でも評価の差はあまりない。しかし面と向かって藤原行成の字のどこがどう上手ですかと尋ねると答えられない。この辺りにも重大な問題が潜んでいるようだ。

余談だが、当館西側の門額「京都国立博物館」は平成知新館の開館に合わせて平成二十六年に真鍮製で新調されたものだ。そこに用いられた文字は館蔵の国宝『日本書紀岩崎本』（十世紀）から学芸部の書跡担当者が選んだものである。その「國」の字が道長経筒の「大日本國」の國の異体字と共通している。博物館を出入りしながらふと気付いて驚いた。